



「第九」初演 100 年 関係資料特別公開

2024 年11月2日(土) ~ 12月26日(木)
和歌山県立図書館 南葵音楽文庫閲覧室



ベートーヴェン 交響曲第 9 番 作品 125

初演 1824 年 5 月 7 日 ウィーン

日本初演 1918 年 6 月 1 日 坂東俘虜収容所

← **日本人による初演** 1924 年 11 月 29,30 日、
追加公演 12 月 6 日 東京音楽学校奏楽堂

徳川頼貞(1892-1954)『蒼庭楽話』より

「私は長い間、ベートーヴェンの最大の傑作といわれるこの第九交響曲を、わが楽壇に於いて演奏させてみたいものだと思っていた。近く自分が建設する南葵楽堂の開堂音楽会にはできればこの希望を実現したいと考えて具体的に研究したのであるが、その当時の上野の音楽学校の管弦楽ではとてもこの望みは不可能であると知って残念で思っていたものであった。」

初公開

和歌山県に寄託されてから 7 年余り、この地での調査研究から南葵音楽文庫所蔵パート譜こそ日本人による「第九」初演奏で使用され、徳川頼貞が準備、提供した事実が明らかになりました。初演 100 年を迎えるにあたり、所蔵する資料を公開し、「第九」演奏の歴史を始動させた頼貞の貢献とその時代をたどります。

南葵(なんき)音楽文庫とは

公益財団法人読売日本交響楽団所蔵の約 2 万点からなる楽譜・音楽書を中心としたコレクション。そのうち約 1 万点は徳川頼貞が設立した南葵音楽楽図書館に由来。ベートーヴェン自筆楽譜など貴重資料を含む。2017 年～和歌山県に寄託・公開。



指揮者

グスタフ・クローン

G・クローン著

乙骨三郎訳

『実際の歌唱教法』1925 年より



徳川頼貞

初演の独唱者たち



長坂好子(ソプラノ) 曾我部静子(アルト) 澤崎定之(テノール) 船橋榮吉(バリトン)



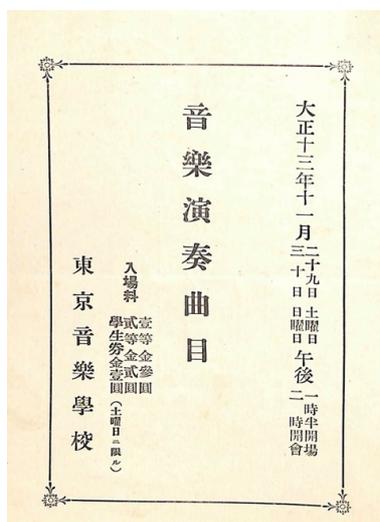
展示場所 ミニ・ガイドツアー

11/2(土)、11/30(土):14 時

11/3(日・祝)、12/1(日):11 時

南葵音楽文庫閲覧室内、入口前の展示ケースに展示。参考資料ふくめ 5 セクション 40 点余からなり、初公開の 1~2 セクションは閲覧室内。閲覧室入室:入口設置の所定用紙に記入。閉室中の場合はカウンターに申し出てください。

南葵音楽文庫研究員による紹介(約 30 分)を上記日程で実施。無料、予約不要。会場の閲覧室にお越しください。各回 10 名程度。多数の場合はグループ分けのうえ実施します。



初演プログラム表紙

主催:和歌山県立図書館 073-436-9520

展示資料紹介

☆は南葵音楽文庫所蔵資料 ★は同文庫の関連資料 無印は南葵音楽文庫以外の資料です。

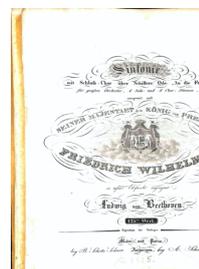
【 1 】 「第九」の総譜(スコア) 南葵音楽文庫閲覧室 展示書棚左側

* いずれも第4楽章 バリトン独唱に続く合唱の冒頭部分を展示

【1-1】 ベートーベン全集第9巻 ブライトコップフ・ウント・ヘルテル社 1863年 ☆
ベートーヴェン全集の楽譜であるが、【2】のパート譜とともに伝承されてきた。1924年の初演に際して指揮者が用いたかは不詳。

【1-2】 初版初刷り楽譜 ショット社 マインツ 1826年(カミングス文庫) ☆ 扉ページ⇒
作曲者によるメトロノームの速度指示を加えて刊行される前に、出版者が印刷した初刷り(あるいは試し刷り)で、きわめて稀少な版。

【1-3】 自筆楽譜ファクシミリ版(正写版) レーダー社、ライプツヒ 1924年 ☆
ベルリン国立図書館が所蔵する自筆楽譜(2001年に世界記憶遺産登録)を、初演100年を機にファクシミリ(現物と同じ大きさ、色あい)で再現した出版。2分冊革装の特装版で、世界の主要図書館にも収蔵例がない。レーダー社は絵はがき印刷でトップの技術を投入。頼貞は出版後直ちに入手した。遠藤宏は南葵音楽図書館ですぐに閲覧し、翻訳に際し参考にした。(【3-3】参照)。「正写版」と記したカードは、1927年に南葵音楽図書館が展示した際に用いたのであろう(【4-10】参照)。表紙⇒



【 2 】 「第九」の初演 使用楽譜 南葵音楽文庫閲覧室 展示書棚右側

* 初演(1924年11,12月)使用のパート譜 南葵文庫音楽部貸出

ブライトコップフ・ウント・ヘルテル版(B&H)、および東京の本郷三丁目にあった高井楽器店の五線紙を用いた写譜(Copy)が併存、B&Hに演奏者によると思われる手稿譜(Ms)が挟み込まれている例もある。

【2-1】 オーボエ I (Copy) ☆

【2-2】 ホルン I (B&H)、一部(Ms) ☆

楽譜の指定とは異なる管のホルンで演奏されていたのがわかる。

【2-3】 チェロとコントラバス (B&H) ☆

いわゆる「歓喜の歌」を奏し始める箇所(第4楽章92小節)以下を展示。

【2-4】 ヴァイオリン I (Copy) ☆ 表紙と写譜⇒

表紙左上には Miss Okumura と鉛筆書き。1921年卒業奥村艶子が使用。

奥村は神田にあった東京音楽学校分教場の教員であった。

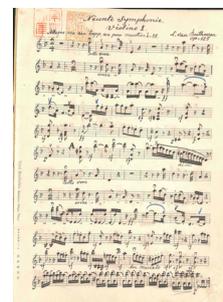
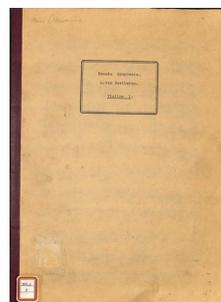
【2-5】 ヴァイオリン I (Copy) ☆

写譜は急ぎおこなわれたようで誤記修正、複数のコピスト、インク色が認められる。

【2-6】 合唱のバス・パート 冒頭部分と最終2ページ(B&H) ☆ バス・パートの最後の部分⇒

【2-7】 合唱のバス・パート(全冊)(B&H) ☆

現在、合唱のパートで残存が確認できているのはバス・パートのみ。1917年12月、頼貞はブライトコップフ・ウント・ヘルテル社のニューヨーク支社にベートーヴェンのスコアとパート譜をつぎつぎに発注した。



【 3 】 徳川頼貞と「第九」 南葵音楽文庫閲覧室 開架設置

* 書架のなかにありますので各自手にとってご覧下さい。場所は下記の【】の番号で示してあります。閲覧後はもとの書架に戻してください。

【3-1】 「第九」の小型総譜(ミニチェア・スコア) リコルディ版 ☆

「第九」を「具体的に研究しめた」と述べている徳川頼貞が、最初に手にしたスコア。1917年の楽譜所蔵目録に記載があり、それ以前に南葵に入っていた。オペラ《アンドレア・シェニア》で知られた作曲家ウンベルト・ジョルダノが提唱した、全てのパートをト音ないしヘ音の譜表とするなどした独自の総譜。歌詞はイタリア語。



【3-2】 田村寛貞 『ベートーヴェンの第九ジウムフォニー』 岩波書店 1924年11月25日発行 ☆



「今やついにその時は来た。疲れ果てたその心を振り起こして、ここに吾人は《歡喜の歌》を謡おうとはする！ 1824年、オーストリア国ウィーンにその初回演奏の産声を挙げてよりここに満百年、今年今月29日、楽聖ベートーヴェン一代の傑作第九ジウムフォニーは方にわが日本における初回演奏の厳かなる響きを伝えようとしている。永き憧れの充たされるの日を数えて、ここに吾人は声高く《歡喜の歌》を謡わんとする！」(本文の巻頭より)

「今年今月我楽壇の中心上野に演奏される就いては、徳川頼貞氏の大正八年以来の熱心なる希望及び多大の援助と、指揮者クローン教授の非常なる努力に負う所が、決して少なく無い。此処にその名を掲げて、感謝の意とする次第である。」(序言より)

発行は初演の4日前であった。

← タイトルページの次の一葉

【3-3】 グローヴ (遠藤宏訳編) 『ベートーヴェンと彼の交響曲1至5』 岩波書店 1925年 ☆

「本書の訳出に際し南葵音楽図書館蔵の貴重図書、ベートーヴェンの交響曲原稿正写版、及び第一版等を種々参考利用し得たことに対し、徳川頼貞侯に厚く感謝し、(下略)」(緒言より) 訳編者より南葵音楽図書館への寄贈書

【3-4】 『南葵音楽事業部摘要 第一』 1929年

【3-5】 『音楽新潮』 1925年新年号 ☆ 小泉治「第九シムフォニーを聴いて」が掲載されている。

【4】 「第九」の前後 演奏者たち 南葵音楽文庫閲覧室前 展示ケース

南葵楽堂 * 徳川頼貞は私設の音楽堂のこけら落とし(1918年10月)に「第九」初演を夢見た。東京音楽学校への働きかけもおこなった。南葵文庫で楽譜の整理に従事し始めた兼常清佐は、書き残している。「(東京音楽学校は)秋は「第九ジウムフォニー」をやります。此等のベートーベン名篇はどれだけ私共の生活を豊かにすることでせう。仮へ音楽学校の演奏にしても」(佐藤篤子宛ての書簡、1918年3月31日付け) ヴォーリズは設計にあたり、頼貞の意を酌んで半地下に音楽資料の収蔵・閲覧のための空間を用意した。

【4-1】 南葵楽堂図書部 表札 ★

【4-2】 南葵楽堂(ペーパーキット 1/300 作製:箕面市・景観模型工房) 芹野与幸氏寄贈

【4-3】 南葵楽堂設計図面(W. M. ヴォーリズ)正面立面(複製、縮小)提供:(株)一粒社ヴォーリズ建築事務所

【4-4】 南葵楽堂設計図面(W. M. ヴォーリズ)1階平面(複製、縮小)提供:(株)一粒社ヴォーリズ建築事務所

【4-5】 南葵楽堂における演奏会 1920年

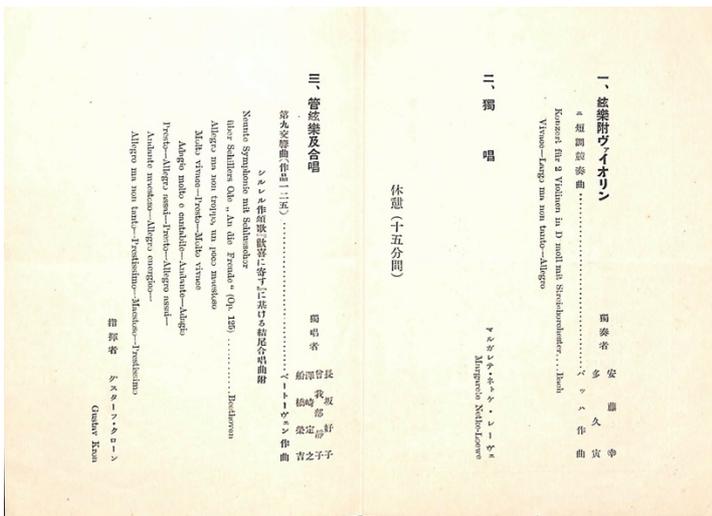
「第九」初演の会場

【4-6】 指揮者:グスタフ・クローン フォトフレーム入りの写真 徳川頼貞への献辞、署名つき 1920年12月 ★

【4-7】 演奏会 東京音楽学校奏楽堂 1924年

11月28日総練習、29日(土)および30日(日)午後2時開演、12月6日(土)午後2時追加公演 入場料:1等3円、2等2円 東京音楽学校の教員、卒業生、学生による独唱、管弦楽、合唱。コンサートマスターは安藤幸(幸田露伴の妹)、ヴァイオリン奏者に颯田琴次、末吉雄二、頼母木駒子、奥村艶子らが、チェロには信時潔らが加わっていた。トロンボーンは萩原英一、ティンパニは高折宮次で、ともに後にピアニスト、ピアノ教員として活躍する。会場を埋めた聴衆のなかには寺田寅彦、小宮豊隆といった学者、英独留学から帰国したばかりの野村光一はじめ小松耕輔、小泉治ら音楽研究者・評論家たちがいた(【3-5】、【5-3】、【5-4】参照)。

【4-8】 プログラム



印刷されたプログラムは二つ折り。2つのヴァイオリンのための協奏曲(パッサ)、独唱ののち休憩をはさんで「第九」が演奏された。

マルガレーテ・ユリア・ネトケ＝レーヴェ(1884-1971) プレスラウ(現在はポーランド)生まれ。ベルリン等で学ぶ。ベツォルトに代わる声楽教員として、1924年10月に東京音楽学校に着任したソプラノ。1931年退任。戦後1946年に復職。戦中、戦後も日本にとどまり多くの声楽家を育てた。この演奏会が日本での初舞台であった。プログラムに記載はないが、パッサのカンタータのアリア、ブラームスの歌曲《とこしえの愛》op.43-1、《鶯に寄せて》op.46-4の3曲を歌った。

【4-9】 「第九」の独唱者たち

長坂好子(ソプラノ) 1891-1970 名古屋市出身 1914年東京音楽学校卒。1920年12月11日 南葵楽堂におけるベートーヴェン百五十年記念音楽会(指揮 G・クローン)に出演(【4-6】参照)。1928年イタリア、1934-35年ドイツに留学。1933年 プラムス《ドイツ・レクイエム》日本初演など重要な演奏会でソリストをつとめた。教育者としても重要な足跡を残している。写真:「長坂好子先生」卒業記念写真帖(1920年3月)より お茶の水女子大学アーカイブ

曾我部(斉藤)静子(アルト) c.1899-? ハワイ出身 牧師の親元をはなれ5歳で京都の叔父のもとに。同志社女学校を経て東京音楽学校でペツォルトに師事し1922年卒。1924年から母校で声楽を教える。弟の煤孫(すまご)龍男はアメリカ本土の大学で声楽を学んだテノール。1932年来日。写真:『ニッポノホンげっぽう』11月号掲載「美しい女流声楽家の面影」より 発行:日本蓄音機商会 1924年

澤崎定之(テノール) 1889-1949 和歌山県有田市出身 東京音楽学校でペツォルトらに師事。1912年卒。演奏活動を続けながら1929年母校の教授に。声楽教科書の翻訳、執筆多数。合唱指揮でも活躍した。唱歌に加え、海南市の黒江小学校校歌(作詞:岩橋貞吉、1923年頃制定)、旧和歌山市歌(作詞:田辺善一、1940年)を作曲した。写真:「洋楽界を背負って立つ人々」(部分) 出版年不詳(1925頃?) 滑川市立博物館所蔵高階哲夫近代音楽資料より

船橋榮吉(バリトン) 1889-1932 兵庫県明石市出身 東京音楽学校でペツォルトらに師事。1910年本科、1912年声楽、1914年ピアノの専攻研究科修了。母校で教え、演奏のほか指揮や作曲もてがけた。1925~27年ベルリンに留学。帰国後は教授となり、音楽行政にも携わった。彼の作品では唱歌《牧場の朝》(作詞:杉村楚人冠、1932年)が知られている。写真:岩瀬牧場資料館(福島県)

ベートーヴェン百年忌(1927年)に * 徳川頼貞と南葵音楽図書館は、「第九」の後もベートーヴェン紹介に注力した。没後100年にあたる1927年3月には、命日にあわせて記念会を開催した。5月3日、定期公演をはじめたばかりの新交響楽団(NHK交響楽団の前身)が、プロ・オーケストラとして最初の「第九」を、近衛秀麿の指揮で演奏した。

【4-10】 ベートーヴェン百年忌記念会 図書陳列目録

南葵音楽図書館主催 ★

内容は 1図書 2手蹟(自筆、ファクシミリ版) 3楽譜 4館外出品
(東京音楽学校、ドイツ大使館、陸軍戸山学校等) 5その他

【4-11】 南葵音楽図書館主催記念会 プログラム ★

【4-12】 新交響楽団 ベートーヴェン百年祭 曲目と解説

主催:東京朝日新聞社 ★



【5】 「第九」初演をめぐって パネル展示:南葵音楽文庫閲覧室入口前 左

* チンタオから俘虜として徳島にきたドイツ人たちは、1917年6月10日に「第九」の《歓喜の歌》を演奏、翌年6月1日に全曲演奏をおこなった。それを知った徳川頼貞は8月に現地を訪問、第1楽章の演奏に接し、専門家ではない人々が自分たちのためにこうした大作品を演奏してしまう教養を羨んだ。

【5-1】 徳島の「第九」1918年6月1日 板東俘虜収容所(現在は徳島県鳴門市)

・「第九」初演の地 撮影:南葵音楽文庫研究員 篠田大基 2018年5月14日

・会場 パラケ1 写真: Die Macht der Musik Beethoven-Haus Bonn の展覧会図録より

・演奏者 徳島オーケストラと合唱団 写真:Beethovens Neunte Sinfonie 徳島県ウェブサイト(ドイツ語版)より
全曲演奏のリハーサルは4月3日に始まり、5月31日には80人規模の合唱が加わった公開の総練習がおこなわれた。

・楽団が使用した楽譜 リスト《フン族との戦い》☆ (縮小画像で展示)

板東俘虜収容所で使用された楽譜はすべて失われたとされていたが、南葵音楽文庫のなかに残されていると判明した。

【5-2】 新聞報道に見る「第九」①

・「第九シンフォニーの初演奏」 読売新聞 11月27日(木)朝刊2頁

・岩村和夫の寄稿 読売新聞 12月3日(水)朝刊4頁

【5-3】 新聞報道に見る「第九」②

・榊原直「第九シンフォニーを聴いて」 読売新聞 12月4日(木)朝刊4頁

・「二百名の合唱」 読売新聞 11月30日(日)朝刊2頁

【5-4】 新聞報道に見る「第九」③

・小松耕輔「第九交響楽の初演を聴く」 朝日新聞 12月2日(火)朝刊5頁

・「音楽だより」 朝日新聞 11月27日(木)朝刊8頁



南葵音楽文庫

「第九」初演100年 関係資料
特別公開 展示資料紹介
発行 和歌山県立図書館
発行日 2024年11月2日